

ほめに関する日米対照研究

—ほめの対象を中心として—

ワトソン 有

日本大学大学院総合社会情報研究科修了生

A Contrastive Study of Compliment between Japanese and American English speakers

— Topic of Compliments —

WATSON Ari

Former graduate student of Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

This is a contrastive study of compliment giving between American English speakers and Japanese speakers, focusing on the topic of compliment and syntactic expressions between speakers of different social status. This study broadens the definition of compliments and includes not only explicit compliments, which are direct expressions or praise, but also implicit compliments, which are indirect forms of speech in which compliment intention can be inferred. The results show many commonalities between compliments of American English speakers and Japanese counterparts, which proves that the pragmatics aspects of the two languages, in terms of giving compliments, are similar. The results also revealed that many differences exist within the syntactic lexical usage in terms of giving compliments in each language. These differences, and the characteristic of each language, can be regarded as compliment strategies when given to those of a different social status.

1.はじめに

ほめは発話行為の一つであり、相手を心地よくさせ、場の雰囲気をやかにし、円滑な人間関係を築くといった対人機能（大野 2010、小玉 1996、Holmes 1986 他）と、カンバセーションオープナーや会話を継続させるといった談話的機能を内包している（小玉 1996）。これらのほめの機能は、第2言語学習者が母語話者との会話に参加する上で、会話を円滑に進めるコミュニケーションツールとして活用することができると思う。しかし、ほめは相手を評価するという行為でもあるため、注意が必要でもあるとされる（大野 2007、大野 2010、Knapp, Hopper & Bell 1984）。

ほめられた時の感想を調査した研究では、対象者の約60%がほめられたことに対する不快さ、防衛本能が働く、あるいは皮肉として受け取るなどの感想

を述べたと言う（Knapp, Hopper & Bell 1984）。ほめは人間関係を築く上で有効な手段であると同時に、誰にどのようにほめるのか配慮が必要な言語行為でもある。場面や相手を考慮した表現方法で相手をほめることで初めてほめを効果的にコミュニケーションツールとして活用することができると思う。

グローバル化の中の異文化間コミュニケーションにおいては、単に言語能力を身につけるだけではなく、相手、場面に配慮するコミュニカティブ・コンピテンスという能力の促進がますます求められている。日本語と英語の各言語におけるほめに関する研究は、ある程度蓄積されている。しかし日本語と英語のほめを扱った対照研究の多くは、大学内など限られた人間関係におけるほめを扱ったものや、ほめの定義が明確でなく、明示的なほめのみを検証したものに限られている。ほめは、相手によつ

て表現の言い換えがなされるため、明示的なほめを対象とするだけでは、こぼれ落ちてしまうほめの表現があると考えられる。そこで本研究においては、肯定的な評価語を用いたほめに限らず、暗示的にほめる表現も含めて、日本語と英語のほめの比較検証を行うこととした。本稿で扱う英語は、米国英語（以下米語）のみを対象とする。

日本語と米語の母語話者は、それぞれの言語で誰に、何を対象として、どのようにほめを表現しているのか、両言語の間にはどのような違いがあるのだろうかという問いのもと、本稿では、社会的人間関係、特に社会的地位が異なる相手に対するほめに焦点をあて、ほめの対象とほめの表現方法を中心に日本語と米語のほめの比較検証を行うこととした。この研究は、日本語や英語を学ぶ第2言語学習者が、社会的・文化的コンテクストに相応しい表現方法で、ほめを効果的にコミュニケーションツールとして使えることを目指したものである。

2. 先行研究

ほめは、日本語英語ともに、ほめの機能、表現形式、対象、返答など様々な観点からの研究が行われている。日本語のほめの表現形式、対象、談話機能に関して内省による検証を行った熊取谷(1989)は、日本語のほめの表現形式の種類は限られており、また評価語は「いい」、「すごい」といった一般的な対象に結びつきやすいものと、特定の対象と結びつきやすい語に分類できると報告している。英語のほめの研究では、nice、good、beautiful、pretty、greatの形容詞がほめの約80%、また動詞ではlikeとloveが約90%を占め、またほめの統語的特徴(Syntax patterns)も限られているという(Wolfson 1983、Holmes 1986、Creese 1991)。英語のほめにおいては、社会的に同等の相手、同性、特に女性同士、また同年齢同士などの親しい間柄では、ほめは表出されやすく、上下関係など立場が異なる関係においては、目上に対しあまりほめないと言われ(Holmes 1986)、このような報告は、日本語のほめにおいても同様に なされている(熊取谷 1989、丸山 1996)。これらの先行研究からは、日本語、英語ともにほめの表現形式は限られており、目上など立場が上の相手にはあ

まりほめないという傾向が両言語に共通していることを示している。

ほめの対象を扱った研究は、ほめの対象領域を主に、①能力(才能・達成、知識、技術)、②外見(容姿、服装)、③努力、④性格に分類しているものが多い(金 2012、丸山 1996、Barnlund & Araki 1985 他)。これらの研究では、ほめの対象が、言語間で異なる傾向であることが示されている。インタビューと質問票を用いて大学生を対象に日米の比較研究を行なったBarnlund & Araki (1985)は、米国人は、外見など容姿や、相手の性格を対象としたほめが多く、一方、日本人は、相手の行動、仕事や勉強などが多く、外見をほめる際には、相手のセンスの良さを対象とするほめが多く、さらに日本人は米国人と比較すると間接的で控え目にほめると報告している。Matsuura (2004)は、日米のほめの対象に関し、社会的距離、心理的距離、地位、性別の観点から検証しており、米国人のほめの表出には、対話者との親疎関係が影響するのに対し、日本人はウチ・ソトの意識がほめの表出に強い影響を与えると結論づけている。さらに、米国人は社会的地位や力関係が上の相手に対してほめることが憚れる。一方、日本人は、精神的に親密な間柄では、地位や力関係が上の相手に対してもほめが表出されると報告している(Matsuura 2004)。このような先行研究からは、ほめの表出において、立場の差異に加え、親疎の関係もほめの表出には関連があり、日米の間でも異なると言える。

熊取谷(1989)は、ほめの対象を「永続的特性」と「一時的特性」に分類し、日本語のほめは、相手の性格や容姿など「永続的特性」に対するほめが多い傾向にあり、一方米語の場合、努力や、意図的な試みによってもたらされた結果、あるいは新しく購入したものなど、「一時的特性」に対するほめが対象になりやすく、その理由として、米語のほめは、変化が生じた相手を承認する「認可行為」という機能が強いと結論づけている。

ほめは「各々の社会・文化が持つ価値体系の違いの一部を投射している」(熊取谷 1989: 101)と指摘されるように、それぞれの社会や文化で良いと見なされるものをほめとして表するので、ほめる対象は、

それぞれの文化や社会的価値観により、違いが生じやすいと言える。しかし、これまでのほめに関する日本語と英語を対象とした先行研究においては、限られた場面での人間関係内におけるほめに焦点が当てられ、ほめの表現においても、肯定評価語を用いた明示的なほめに限られている。相手をほめるという言語行為は、「複雑な社会言語学的スキル」(Holmes 1986: 449)であり、相手や場面にふさわしい表現の使い分けを理解して初めて、コミュニケーションツールとしてほめを活用することができる。語彙単位でほめを捉えるだけでは、ほめの一面しか検証できないと考える。そこで、本研究においては、さまざまな場面、そして異なる人間関係におけるほめを調査データに用い、日本人と米国人が、何を対象とし、いかような表現方法で相手をほめているのか日米比較することとする。

3.研究目的と研究課題

本稿の目的は、日本語母語話者と米語母語話者が何を対象とし、どのようにほめを表現しているのか、異なる人間関係に焦点を当て、各言語のほめの方法を解明することにある。具体的には日米のテレビドラマを分析し、以下の点を明らかにすることを目的とする。

- (1) 日本語と米語では、どのような対象事物をほめるのか、またどのような方法でほめるのかを、相手との人間関係別に比較検証する。
- (2) (1) で明らかになった類似点と相違点を取り上げ、具体的にどのような表現が使用されているかを分析する。

4.調査方法

ほめのデータ収集には、日米のテレビドラマを視聴し、それらの中で用いられたほめの表現を書き起こす手法を用いる。米語のテレビドラマにおいては、米語によるオリジナル版のみを使用した。

テレビドラマのシナリオは、脚本家の特色や、登場人物の脚色のため、自然さに欠けるという問題点が考えられる。大野(2010)は、シナリオ談話を提示した質問票を用いた調査を行い、実際の言語使用状況とシナリオの差異を検証した結果、セリフの不

自然さは、脚本家や作品の年代によって異なりがあることを明らかにしている。そのため、現代語資料としてテレビドラマを用いるためには、多岐にわたる比較的新しい作品を多く用いることで、特定の脚本家の特色は緩和され、自然さに欠けるという問題点が解消できると指摘している。以上を踏まえた上で、本稿においては、2000年代以降に発表された比較的新しい作品(日本語テレビドラマ計25本、米語ドラマ計20本)を対象とし、日本語214件と米語175件のほめの表現を収集した。

5.本研究の枠組み

5.1 本研究で扱うほめの分類

大野(2007)は、ほめの多義性に着目し、「羨望」、「感情」、「感謝」、「ねぎらい」、「祝賀」などの言語行動が、ほめを意図する表現として用いられると結論づけている。そこで本稿においても、大野(2007)の枠組みを援用し、ほめを大きく「明示ほめ」と「暗示ほめ」に分類する。「明示ほめ」とは、「すごい」や「きれい」などの肯定評価語を含んだほめである。「暗示ほめ」とは、肯定評価語は含まず、間接的にほめを意図する表現であり、以下の4つに下位分類する。①「一位になったね。」というようなほめる理由や根拠を述べる「事実指摘」、②「好きです」、「ワクワクします」といったほめ手自身の感情を述べほめを意図する「感情」表明、③「おかげさまで」などの感謝表現を述べる「感謝」表明、④「おめでとうございます」など祝いなどの慣例表現を述べる「祝い」表明である。また、ほめの表現には、「すごいなあ、お前はやっぱり天才なんだな。」といった、「すごい」という「明示ほめ」に、「お前はやっぱり天才なんだな。」という「明示ほめ」を加えたものや、「素敵なご家族。最近常務の写真を撮らせてくれていう依頼が多いんですよ。」といった、「素敵なご家族」という「明示ほめ」に、「最近常務の写真を撮らせてくれていう依頼が多いんですよ。」という「事実指摘」の「暗示ほめ」を加えた表現がある。ほめの表現を追加することで、ほめる意図を強調したり、ほめの根拠を具体化させていると考えられ、これらを、「追加ほめ」とした。本調査のほめの表現方法の分類は次の通りである。

<ほめの表現方法の分類>

明示ほめ

- (1) 対象物＋肯定評価語：例「掲載 30 年の歴史、すごいです。」
- (2) 肯定評価語＋対象物：例「ももこ、かわいい名前だね。」

暗示ほめ

- (1) 「事実指摘」：ほめの根拠となる具体的な事実を言及をしたもの。例「一位になったね。」
- (2) 「感情」表明：好き、嬉しいなどほめ手の個人的な感情を伝えるもの。例「家族のために毎朝朝ごはんをお作りになるなんて、この増岡、感心しております。」
- (3) 「感謝」表明：感謝の言葉を述べたもの。例「お陰様で大学に進学することができました。」
- (4) 「祝賀・祝い」：「おめでとう」などを含める祝いなどの慣例表現。例「お嬢様のご婚約おめでとうございます。」

追加ほめ：下記の 4 つの表現方法のいずれかに相当するもの。

- (1) 「明示ほめ」に「暗示ほめ」を追加したもの。
- (2) 「暗示ほめ」に「明示ほめ」を追加したもの。
- (3) 「明示ほめ」の前後に「暗示ほめ」を述べたもの。
- (4) 「明示ほめ」と「暗示ほめ」を 3 件以上述べたもの。

5.2 ほめの対象の分類

日米のほめの比較研究では、ほめの対象が一時的か恒常的かという観点からの違いを指摘したものがあある（熊取谷 1989）。本研究においてもそれらを考慮し、ほめの対象を下記の 7 項目に分類した。

<ほめの対象と分類>

- (1) 「外見」：容貌、体格、髪型、衣類など身体に密着したもの。
- (2) 「所有物」：カバン、携行品、家、不動産など。
- (3) 「才能・達成」内面（恒常的）：先天性能力や長期的に養われた能力、知識、出世、専門的知識や技術。
- (4) 「行動・性格」内面（一時的）：発話時に近い時期での行動や考え方、相手の性格に起因する行

為、（親切心から何かを教えるなど。）

- (5) 「人全体」内面：相手の全体的な魅力に言及したもの。一つのほめが「外見」、「才能・達成」など複数の対象をほめるもの。
- (6) 「作品」：料理、絵、名前などほめ手が作成したもの、プレゼントやお土産などほめ手が選んだ物事、プレゼンテーションなどのパフォーマンスも含む。
- (7) 「家族」：配偶者、兄弟など。

5.3 人間関係の分類

本稿における人間関係の上下関係の定義においては、南（1987）の示す「上下関係」を参考にし、次の関係を上下関係とみなした。①身分的上下関係：主に社会的階級、②生得的上下関係：親子などの序列、③役割的上下関係：ある社会における役割に基づく関係、④能力的上下関係：ある集団における指導力の有無によるもの、⑤立場的上下関係：客と店員、貸す側と借りる側など、条件に応じて変化するもの。以上の定義に含まれる関係を上下関係とし、そのうち目上から目下に対するものを「上→下」、目下から目上に対するものを「下→上」とした。それ以外の上下関係のないものは全て「その他」に分類した。

6. 日米のほめの対象と表現方法の調査結果**6.1 日本語のほめの対象と表現方法：数量的調査**

日米のテレビドラマより収集したほめを各言語それぞれ、まず人間関係によって「上→下」「下→上」「その他」に分類した上で、対象と表現方法によって分類した（表 2 と 3）。表 2 は日本語、表 3 は米語の分類結果を示したものである。

6.1.1 日本語のほめの対象と表現方法

まずは、日本語のほめを見ていく（表 2）。日本語のほめの総数は 214 件であり、人間関係を見ると、多い順に「その他」（97 件）、「上→下」（81 件）、「下→上」（36 件）であった。ほめの対象を見ると、多い順から「行動・性格」（総計 81 件）、「才能・達成」（総計 63 件）、「作品」（総計 28 件）、「外見」（総計 19 件）の順である。「所有物」と「家族」の総計は

それぞれ4件と少ない。人間関係別にほめの対象を見ると、「行動・性格」と「才能・達成」が、いずれの関係においても表出頻度が高く、続いて「作品」、次に「人全体」である。「外見」を対象としたほめは、「上→下」と「下→上」では非常に少ないが、「その他」では、2割近くを占めており、ほめの対象となりやすいと言える。次に、ほめの表現方法を見ると、

「下→上」は、「追加ほめ」でほめる方法が最多(16件)であり、続いて「暗示ほめ」(13件)、「明示ほめ」(7件)が最少である。一方、「上→下」と「その他」は、「明示ほめ」が最多であり、「暗示ほめ」が少ない。この結果から目上には、他の関係と比べ明示的にほめることが少ないと言える。

<表2 日本語のドラマに表出されたほめの表現と対象>

	人間関係												総計
	上→下				下→上				その他				
	明示	暗示	追加	合計	明示	暗示	追加	合計	明示	暗示	追加	合計	
外見	2 2.5	0 0.0	0 0.0	2 2.5	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	12 12.4	3 3.1	2 2.1	17 17.5	19
所有物	0 0.0	0 0.0	1 1.2	1 1.2	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 2.1	1 1.0	0 0.0	3 3.1	4
才能達成	13 16.0	11 13.6	5 6.2	29 35.8	3 8.3	5 13.9	3 8.3	11 30.6	8 8.2	5 5.2	10 10.3	23 23.7	63
行動性格	11 13.6	7 8.6	13 16.0	31 38.3	4 11.1	6 16.7	8 22.2	18 50.0	14 14.4	6 6.2	12 12.4	32 33.0	81
人全体	3 3.7	0 0.0	2 2.5	5 6.2	0 0.0	1 2.8	2 5.6	3 8.3	5 5.2	1 1.0	1 1.0	7 7.2	15
作品	6 7.4	3 3.7	1 1.2	10 12.3	0 0.0	1 2.8	3 8.3	4 11.1	11 11.3	3 3.1	1 1.0	14 14.4	28
家族	0 0.0	1 1.2	2 2.5	3 3.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 1.0	4
合計	35 43.2	22 27.2	24 29.6	81 100.0	7 19.4	13 36.1	16 44.4	36 100.0	52 53.6	19 19.6	26 26.8	97 100.0	214

注：上段の数値はほめの件数、下段はそれぞれの人間関係の総数に対する各対象の%の値を示し%の表記は省略する。「明示ほめ」は「明示」、「暗示ほめ」は「暗示」、「追加ほめ」は「追加」と示す。

<表3 〇米語のドラマに表出されたほめの表現と対象>

	人間関係												総計
	上→下				下→上				その他				
	明示	暗示	追加	合計	明示	暗示	追加	合計	明示	暗示	追加	合計	
外見	1 2.0	0 0.0	0 0.0	1 2.0	1 3.8	0 0.0	0 0.0	1 3.8	12 12.0	1 1.0	4 4.0	17 17.0	19
所有物	2 4.1	0 0.0	0 0.0	2 4.1	2 7.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 3.8	0 0.0	0 0.0	3 3.0	5
才能達成	4 8.2	5 10.2	4 8.2	13 26.5	0 0.0	4 15.4	5 19.2	9 34.6	8 8.0	8 8.0	10 10.0	26 26.0	48
行動性格	9 18.4	4 8.2	7 14.3	20 40.8	1 3.8	4 15.4	6 23.1	11 42.3	9 9.0	5 5.0	6 6.0	20 20.0	51
人全体	0 0.0	1 2.0	7 14.3	8 16.3	2 7.7	0 0.0	1 3.8	3 11.5	4 4.0	0 0.0	13 13.0	17 17.0	28
作品	2 4.1	0 0.0	2 4.1	4 8.2	0 0.0	0 0.0	1 3.8	1 3.8	14 14.0	0 0.0	1 1.0	15 15.0	20
家族	1 2.0	0 0.0	0 0.0	1 2.0	0 0.0	1 3.8	0 0.0	1 3.8	2 2.0	0 0.0	0 0.0	2 2.0	4
合計	19 38.8	10 20.4	20 40.8	49 100.0	6 23.1	8 30.8	12 46.2	26 100.0	52 52.0	14 14.0	34 34.0	100 100.0	175

注：上段の数値はほめの件数、下段はそれぞれの人間関係の総数に対する各対象の%の値を示し%の表記は省略する。「明示ほめ」は「明示」、「暗示ほめ」は「暗示」、「追加ほめ」は「追加」と示す。

6.1.2 米語のほめの対象と表現方法

次に米語のほめを見る(表3)。米語のほめの総数は175件であり、人間関係を見ると多い順に、「その他」(100件)、「上→下」(49件)、「下→上」(26件)である。ほめの対象は、「行動・性格」と「才能・達成」の表出頻度が高く両者を合わせると総計99件にのぼる。続いて「人全体」(総計28件)、「外見」(総計19件)の順であり、「所有物」と「家族」は、少ない。

ほめの表現方法においては、「下→上」は、「追加ほめ」が最多であり、「明示ほめ」が最少である。「その他」と「上→下」は、「明示ほめ」と「追加ほめ」が多く「暗示ほめ」が比較的少ない。この結果から、目上には、明示ほめでほめることが少ないと言える。

6.1.3 ほめの対象の日米比較

表2と表3をもとに日本語と米語のほめの対象の類似点と相違点を見る。まず類似点においては、両言語ともに、いずれの関係においても「行動・性格」と「才能・達成」を対象としたほめが多く、続いて「作品」と「外見」である。また両言語とも「家族」と「所有物」はいずれも非常に少なかった。ほめの対象を7項目に分け検証したが、ほめの対象の全体的傾向は「人全体」を除いた6項目において、日米類似した傾向が見られた。

日米のほめの対象の相違点においては、「人全体」と「作品」を対象としたほめに相違点が見られた。いずれの関係においても、米語の「人全体」の平均表出頻度は10%以上であるが、日本語はいずれも10%以下と低い傾向にある。また「下→上」の「作品」を対象としたほめに日米の違いが見られ、日本語(11.1%)の方が、米語(3.8%)よりも多かった。

6.1.4 ほめの表現方法の日米比較

次に、日米のほめの対象がどのように表現されているか、ほめの表現方法の調査結果を見る。人間関係別に見ると、日米ともに「下→上」の「行動・性格」を対象とするほめの表現方法が、「上→下」と「その他」とは異なっている。「行動・性格」を対象とするほめの表現方法は、両言語ともに「上→下」と「その他」は、「明示ほめ」と「追加ほめ」が多いが、「下

→上」は、「暗示ほめ」と「追加ほめ」が多かった。

「作品」を対象とするほめは、両言語ともに「上→下」と「その他」は「明示ほめ」が多い。また、「外見」を対象とするほめは、日米語ともに「その他」のみ表出頻度が多く「明示ほめ」が多かった。

「才能・達成」を対象とするほめの表現方法においては、日米の間で類似点とともに相違点が見られた。「その他」の関係では、日米間で類似点が見られ、「明示ほめ」(日本語8.2%、米語8.0%)と、「暗示ほめ」(日本語5.2%、米語8.0%)、そして「追加ほめ」(日本語10.3%、米語10.0%)の表現方法の差異が5%以下であることから、「その他」の関係における「才能・達成」を対象とするほめは、両言語ともに表現の使い方に違いはなかった。しかし、「下→上」と「上→下」では、日米間に違いが見られた。日本語の「下→上」は、「明示ほめ」(8.3%)、「暗示ほめ」(13.9%)、「追加ほめ」(8.3%)であり、表現方法に大きな差がない。一方、米語においては、「暗示ほめ」(15.4%)と「追加ほめ」(19.2%)が多いが、「明示ほめ」は使われていなかった。また、日本語の「上→下」においては、「明示ほめ」(16.0%)と「暗示ほめ」(13.6%)が多いが、米語では、「明示ほめ」(8.2%)、「暗示ほめ」(10.2%)、「追加ほめ」(8.2%)の頻度に大きな違いはなかった。

6.2 日米のほめの対象と表現方法：質的分析

日本語と米語のほめの対象とそれらの表現方法を、人間関係別に分類し比較した結果、「行動・性格」と「才能・達成」は、両言語とも表出頻度の高い対象であった。また、「人全体」は米語ではいずれの関係も10%以上であるが、日本語は10%以下であり、両言語間に差異が見られた。ここでは、それらの項目の表現方法を分析し、各言語のほめの特徴を検討していく。

6.2.1 日米のほめの対象と表現方法：「行動・性格」

本稿の「行動・性格」の定義には、ほめの発話時に比較的近い時期に行われた相手の行為や思想、また相手の性格に起因する行為(親切心など)などが含まれ、調査では日米いずれの関係においても表出頻度が高い傾向が示された。熊取谷(1989:100)は、

米語のほめは、「認可行動」として機能が強く、相手の「意図的な試みにより生じた変化に対して向けられる」と指摘しているが、本調査結果からは、「認可行動」としてのほめの機能が、米語のほめの特徴に限らず、日本語においても同様の機能があることが判明した。

「一時的特性」である「行動・性格」を対象とするほめの表現方法においては、「下→上」は、日米語ともに「追加ほめ」が約 20%を占めており、他の表現方法と比較し、比較的高い傾向が見られた。これらのほめには、次のような例が見られた。

例 1: “Linda, Thank you so much for all the help you gave us.” (リンダ、自分達を助けてくれたことに感謝する。)

例 2: 「岩倉先生、私の代になっても変わらずのご愛顧、本当にありがとうございます。」

例 1 は、「Thank you so much (ありがとう)」という「感謝」表明の後、「all the help you gave us. (自分達を助けてくれたこと)」という「事実指摘」を述べている。また例 2 は、「私の代になっても変わらずのご愛顧」という「事実指摘」の後に、「本当にありがとうございます」と「感謝」を述べている。両例で見られる様に、目上に対する「行動・性格」を対象とするほめでは、相手の「行動・性格」を「事実指摘」により言及し、その前後に「感謝」や「祝い」を述べる「追加ほめ」の表現が多く見られた。「感謝」や「祝い」は、ほめを意図する言語行動とされているが、大野 (2010) の日本語のほめの調査では、これらのほめの表出頻度は、低いという結果が示されていた。しかし、本調査では、「感謝」や「祝い」が、目上の「行動・性格」を対象とするほめにおいて、「事実指摘」の前後に追加する形で多く用いられていることが明らかになった。「感謝」や「祝い」といった言語行動が、目上にほめを意図とし用いられる際には、相手の「行動・性格」を「事実指摘」で言及し、「感謝」や「祝い」と共起させる表現方法が多いと言える。これは、相手の行動や性格に対して述べたほめの評価性を緩和させるために、「感謝」や「祝い」表現を追加していると考えられ、両言語に共通した目上に対するほめの工夫の一つであると言える。

6.2.2 日米のほめの対象と表現方法:「才能・達成」

調査結果では、「才能・達成」を対象とするほめに日米の間で、いくつかの類似点と相違点が見られた。まず、類似点としては、両言語ともに「その他」では「明示ほめ」が多かった。「明示ほめ」は肯定評価語を用いて、あからさまにほめる方法であり、表 2 と 3 の調査結果で示されたように、「その他」である同等の関係において使いやすいほめの表現方法であると言える。しかし、本調査では「その他」の「才能・達成」は、「明示ほめ」とともに、「暗示ほめ」も多いという結果が示されたことにより、「才能・達成」は、「その他」の関係においても、間接的にほめる方法が多くとられており、「才能・達成」といった相手の専門性や恒常的能力を言及することは、いかなる人間関係においても注意が必要な対象であり、そのような意識が日米同様に存在していることを示していると言えよう。しかし、注意が必要な対象ではあるが、両言語ともに、「才能・達成」は、表出頻度がいずれの関係においても高い傾向が示され、両言語の表現方法を見ると、いくつかの相違点があることが明らかになった。「上→下」では、日本語は、「明示ほめ」と「暗示ほめ」が多く、米語では、いずれの方法も同様に使用されていた。また「下→上」では、日本語は、3 つの表現方法が同様に使用されていたが、米語では「明示ほめ」は使用されていなかった。これらの表現形式を見ると、両言語の「才能・達成」を対象とするほめの特徴が明らかになった。まず、日本語の「下→上」の「才能・達成」では、下記のような例が見られた。

例 3: 「はい、あのやまびこ商事っていう専門商社に。総合商社に比べたら、あの、月とスッポンなんですけど。」

例 3 は、付き合っている彼女の父親に、自分の勤務先(やまびこ商事会社)について話す場面である。彼女の父親は、同じ業種であるが、やまびこ商事より大手の会社の役員であり、「下→上」の関係である。自分の勤務先と相手側の会社を、「月とスッポン」と比喻することで、大会社で役員として勤務する相手の「才能・達成」を称えている。本調査では、「月とスッポン」を始め、「エース」、「天才」、「ナンバーワン」などの名詞の最上級レベルの表現が「下→上」

で多く見られた。大野 (2010) は、目上には、「最高」、「一番」、「完璧」といった評価語の最上級レベルを用いることで、ほめの肯定性が強調され、これらが目上に対するほめの工夫の一つであると述べている。本調査においても、大野 (2010) と同様の傾向が見られ、またこれらの表現が、「才能・達成」を対象とするほめで多く使われていることが明らかになった。また、最上級レベルを用いる表現形式の他にも、下記のような例もいくつか見られた。

例 4: 「真中先生だからこそ、先を見通して総腸骨静脈を用意したんじゃないですか。」

例 5: 「あの陸王を作られた宮澤さんですね。」

例 4 は、後輩の外科医が、先輩の外科医の能力をほめるセリフである。「(能力がある外科医の) 真中先生だからこそ」という「事実指摘」で相手の外科医としての能力を言及しほめている。「事実指摘」である「暗示ほめ」は、評価語を用いず間接的にほめを意図する表現だが間接的であるため、ほめの意図が相手に伝わらないという問題点がある。日本語では、例 4 や例 5 のように、副助詞の一つである「こそ」や、連体詞である「あの」や「その」を、「才能・達成」の「事実指摘」で用いる例がいくつか見られた。これらのことから、日本語の「下→上」の「才能・達成」においては、最上級レベルの評価語を用いて「明示ほめ」でほめるという工夫、また「暗示ほめ」においては、連体詞や副助詞などの強調表現を用いてほめるという工夫が、目上に対するほめでは用いられていると言える。

米語の「才能・達成」を対象とするほめは、「下→上」では、「明示ほめ」が用いられていないという結果であった。米語の「才能・達成」においては、次のような例が見られた。

例 6: 牧師: I remember you of course. People and the states owe you a great deal.

刑事: Not as much as we owe you. Charitable organization, education incentive. I am proud of our administer.

牧師: 「あなたのことはもちろん覚えていますよ。市民も州もあなたには大きな借りがある。」

刑事: 「我々のあなたに対する借りほどではありませんよ。無償団体、教育的インセンティブ。」

私は私たちの牧師を尊敬しています。」

例 6 は、刑事と牧師の会話であり、刑事は牧師の功績を「事実指摘」で言及しほめている。牧師は高い地位にあるため、関係は「下→上」である。例 6 は、「not as much as (あなたほどではない)」という比較を用いている。例 6 のように、米語の「才能・達成」を対象としたほめにおいては、比較表現が多く見られた。表 4 は、米語の「才能・達成」を対象とするほめにおいて、比較表現が使われたほめの頻度を、人間関係別に示したものである。

<表 4 米語の「才能・達成」のほめの比較表現の表出頻度>

	上→下	下→上	その他	合計
「才能・達成」計	13	9	26	48
比較表現	4 (30.8%)	3 (33.3%)	4 (15.4%)	11 (100.0%)

注: () は、各人間関係の「才能・達成」を対象とするほめで用いられた比較表現の割合を示す。

表 4 を見ると、米語の「才能・達成」を対象としたほめでは、「上→下」、「下→上」とも、比較表現が使われるほめが多く 30% 以上を占めている。米語では目上の「才能・達成」を対象とする場合、相手の優位性を裏づけるための根拠として、また相手の能力が優れていることを強調する手段として比較表現を用いていると考えられ、米語の目上に対する「才能・達成」を対象とするほめの工夫の一つであると言える。

6.2.3 日米のほめの対象と表現方法: 「人全体」

調査結果では、「人全体」を対象とするほめの表出頻度は、いずれの関係においても米語に多い傾向が示された。米語では、次のような例が見られた。

例 7: You did what you needed to be done. That's why I chose you. Service background, clean history, photogenic, the whole package. More importantly, ruthless pragmatism.

「君は、必要なことをやったんだ。だから君を選んだんだ。労働者としての履歴、清い経歴、

写真映えする外見、全てを兼ね備えている。もっとも重要なことは、無慈悲な実利主義であることだ。」

例7は、上司が部下の「外見」(photogenic (写真映えする外見))や「行動・性格」(you did what you needed to be done (必要なことをやった))、また、相手の「才能・達成」に関して、clean history (清い経歴)やthe whole package (全て兼ね備えている)といった様々な対象を言及しほめている。米語の「上→下」と「その他」の関係におけるほめでは、例7のように、「明示」や「暗示」を2件、3件と織り交ぜながら、ほめの根拠や、ほめ手自身の感情を述べる手法が多く見られ、説得的であることが、米語のほめの特徴の一つであると言える。

日本語の「人全体」の表出頻度は、米語と比較すると少ない傾向が示された。日本語の「人全体」のほめでは次のような例が見られた。

例8:「瀬崎さんてほんと作家さんを大切にしますよね。まあ、そこが瀬崎さんのいいところだけど。」

例8は、先輩の編集社員が、担当先の作家の体調を案じ見舞いに出向く際に、後輩の社員が先輩に向けたセリフであり、相手の「行動・性格」をほめている。日本語では、例8のように、相手の「行動」を「事実指摘」により言及し、「そこがいいところ」といった相手の性格的魅力を「明示ほめ」で追加するといった「追加ほめ」の表現が多く見られた。その他にも、下記のような相手の性格や人間性を表す語が見られた。

「さすがは～」、「～さんは見込みがある」、「～なら間違いない」、「～さんは強い人だ」、「～への思いが強い。」(～には、ほめの対象者の名前が入る)

これらの表現は、主に「行動・性格」を「事実指摘」によって言及する前後に追加されている。日本語の「人全体」のほめが少ないという結果が示された要因は、日本語では一件のほめにおいて、いくつもの対象を言及する方法があまり取られていないこと、また、相手の「行動」を言及する前後に、相手の人間的魅力や性格をほめるといった表現方法が多く取られており、本研究においては、これらのほめを「行動・性格」の「追加ほめ」と分類したため、「人全体」のほめが少ないという結果になったことが可

能性として考えられる。

7.まとめと今後の課題

これまでの日本語と米語のほめを扱った対照研究は、ほめとして分かりやすい、明示的なほめの表現を対象としているものに限られていた。しかし、ほめめという言語行動は、相手や場面によって使い分けがなされていると考えられ、ほめを意図する表現も含めて検証する必要があると考えた。本研究では、従来の明示的なほめに、間接的に表現するほめを加え、異なる立場間におけるほめの表現方法とほめの対象に焦点を当て量的および質的に日米語におけるほめの検証を行った。

ほめの対象を7項目に分類し、人間関係別に日米比較検証した結果、6つの項目(「才能・達成」、「行動・性格」、「作品」、「外見」、「所有物」、「家族」)において日米類似した傾向がみられた。これらのうち「才能・達成」を除いた5つの項目は、ほめの表現方法も日米類似した傾向が見られた。下記に日米の類似点と相違点をまとめる。

<日本語と米語のほめの対象と表現の類似点>

- (1)「才能・達成」と「行動・性格」は、いずれの関係においても、ほめの対象として最多である。
- (2)「行動・性格」は、「追加ほめ」が多く、特に「下→上」で多い。
- (3)「所有物」・「家族」はほめの対象となりにくい。「作品」は、「上→下」と「その他」では、「明示ほめ」が最多である。
- (4)「外見」は、「その他」の「明示ほめ」が多い。

<日本語と米語のほめの対象と表現の相違点>

- (1)「人全体」を対象とするほめは米語の方が多い。
 - (2)「才能・達成」の表現方法は、「その他」は両言語とも表現方法に違いはないが、「上→下」と「下→上」では、日米で異なる。
- ・「上→下」
 - (1) 日本語:「明示ほめ」と「暗示ほめ」が多い。
 - (2) 米語:表現の使い方に違いがない。
 - ・「下→上」
 - (1) 日本語:「暗示ほめ」が多い。
 - (2) 米語:「暗示ほめ」と「追加ほめ」が多い。

ほめの対象は良いと認めるものを表すものなので、各文化や社会の価値観が反映される（熊取谷 1989、Holmes 1986）と言われる。しかし、ほめの対象の分類を一時的かあるいは恒常的かという観点を含めて分類した本調査では、日本語と米語の両言語間で類似点の方が多く示され、誰に何を対象としてほめるのかという価値観が、日米共通していることが明らかになった。

調査結果では、日米ともに「行動・性格」、「才能・達成」の表出頻度が高いという結果であった。熊取谷（1989）は、米国のほめは、「一時的特性」の対象に対するほめが多く、「認可行動」としての機能が強く、一方、日本語のほめは相手の「永続的特性」に言及する傾向が見られ「認可行動以外の領域を含む言語行動」であると指摘している。しかし、本調査では、「一時的特性」である「行動・性格」と「永続的特性」である「才能・達成」は、両言語いずれの関係においても多いという結果が示されたことから、ほめるという言語行動が、日米の両社会において、一時的であれ恒常的であれ、相手の行動や達成成果、そして相手の試みや努力を承認する「認可行動」として機能していると言える。また、米語の「下→上」の「才能・達成」では、比較表現が多く見られ、日本語においては、副助詞や連体詞による強調表現が多く見られた。これは、日米間で方法は異なるものの、目上の「才能・達成」を対象としてほめる際、強調表現や比較表現を用いることで、相手の永続的特性が優れていることを強調し、ほめの信憑性を高める工夫として用いられていると考えられる。

調査結果では、「行動・性格」を対象とするほめでは、両言語ともいずれの関係においても「追加ほめ」の表現方法が多い傾向が見られた。具体的には、「行動・性格」を対象としほめる際には、相手の行動を「事実指摘」によって言及し、その前後に、「感謝」や「感情」といった表現が付け加えられる方法が多かった。ほめには多義性があるとされ、「感謝」「祝い」といった言語行為がほめを意図する表現であると先行研究では報告されているが、これらの言語行動は、単独でほめとして成立するわけではなく、相手の「行動・性格」を言及する表現と共起することで、ほめを意図する表現として成立し、間接的には

める工夫として用いられていることが本調査から明らかになった。

「人全体」のほめは、米語の表出頻度がいずれの関係においても日本語よりも多いという結果であり、米語では一件のほめにおいて様々な対象に言及しほめる傾向が強いことが分かった。日本語においては、相手の行動に言及し、その前後に、「いい人」といった相手の性格や人間的魅力を言及する「明示ほめ」を追加する方法が多く取られていることが分かった。

以上のように、本調査では、日米のほめの表現と対象においていくつかの類似点と相違点を見出すことができた。これらの類似点は、何を対象にして誰をほめるのかといった価値観が日米で類似していることを示しており、こうした共通意識を認識することは、各言語の学習者の異文化間コミュニケーションの場において、相互理解の一助になると考える。また、日米のほめの相違点を明らかにすることで、各言語のほめの工夫が明らかになった。これらは相手に対する配慮を示す方法であり、ほめをコミュニケーションツールとして活用する上で有意義なものであると言えよう。

今後の課題においては、本研究では異なる社会的関係、多様な場面におけるほめの表現を抽出するため、調査資料に日米のテレビドラマを用いた。しかし、異なる社会的人間関係に焦点を当てていたため、医療、刑事、政治、会社などのジャンルが多くなった。ジャンルの選出方法にさらに幅を持たせることで、異なる場面でのほめを検証できると考える。また、今回の調査では、親疎、性差などの社会的変数は、調査対象には含んでおらず、これらは日米のほめにおいても影響を与える要因になるため、これら要素も加えて、さらに検証していきたい。

参考文献

- 大野敬代（2007）「「ほめ意図表現」の枠組みと機能」『早稲田大学日本語研究』第 16 号、109-120。
 大野敬代（2010）「日本語談話における「働きかけ」と「わきまえ」の研究：目上に対するほめと「謙遜」の分析を中心に」博士学位論文、早稲田大学
 小玉安恵（1996）「対談インタビューにおけるほめの

の機能 (1) —会話者の役割と談話における—と
いう観点から」『日本語学』15-5、59-67. 明治書
院

金庚芬 (2012) 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する
対照研究』ひつじ書房

熊取谷哲夫 (1989) 「日本語における誉めの表現形式
と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論
的・実践的研究 (2)』97-108. 広島大学教育
学部日本語教育学科

丸山明代 (1996) 「男と女のほめ—大学キャンパスに
おけるほめ行動の社会言語学的分析—」『日本語
学』5-15、68-80. 明治書院

南不二男 (1987) 『敬語』岩波書店

Barnlund, D. C., & Araki, S. (1985) Intellectual
Encounters: The Management of compliments by
Japanese and Americans. *Journal of Cross-Cultural
Psychology*, 16 (1), 9-26.

Creese, A. (1991) Speech act variation in British and
American English. *Working Papers in Educational
Linguistics*, 7 (2), 37-58.

Daikuhara, M. (1986) A study of compliments from a
cross-cultural perspective: Japanese vs American
English. *Working Papers in Educational
Linguistics*, 2 (2), 103-134.

Holmes, J. (1986) Compliments and Compliment
Responses in New Zealand English.
Anthropological Linguistics, 28 (4), 485-508.

Knapp, L., Hopper, R., & Bell, R. (1984) Compliments:
A descriptive taxonomy. *Journal of Communication*,
34 (4), 12-31.

Matsuura, H. (2004) Compliment-giving behavior in
American English and Japanese. *JALT Journal*, 26.
147-170.

Wolfson, N. (1983) Compliments in cross-cultural
perspective. *Tesol Quarterly*, 15 (2), 117-124.

(Received: June 19, 2019)

(Issued in internet Edition: July 1, 2019)